資料1-1 令和5年9月29日（金）
第10回　魅力ある新国立公文書館の展示・運営の在り方に関する検討会

英仏視察報告

実施日	視察先	出席委員
令和5年7月4日	イギリス国立公文書館（TNA）	川口委員 伏木委員
令和5年7月6日	フランス国立公文書館（AN）パリ館	
令和5年7月7日	フランス国立公文書館（AN）ピエールフィット館	

イギリス国立公文書館

The National Archives (TNA)

日　時：2023年7月4日 10:00~13:45

場　所：ロンドン

説明者：Burgess氏 (Head of Events & Exhibitions)

Fleming氏 (Exhibition & Interpretation Manager)

Carter氏 (Education Manager)

Oliver氏 (Head of Venue Services)

Humphries氏 (Strategic Relations Coordinator)

基本情報

- イギリスの国立公文書館（以下、TNA）は、英国政府、イングランド、ウェールズの公式な公文書館であり出版部門でもある。1978年に建設された本館と、1995年に増設された新館からなる。
- 1838年に設立された公記録館（Public Record Office）を母体とし、2003年から2006年の間に王立手稿史料委員会、公共機関情報局、王立印刷局が統合された。
- 1000年以上前から現代にいたるまでの文書を保存管理している。1,100万件以上に及ぶTNAのコレクションは世界最大級である。
- 2015年から2020年までに1階パブリックスペース（7,200㎡）のリニューアルを実施（後出のオーディトリアムの設置など）。空間的な親しみやすさ、居心地の良さなど来館者スペースの充実を目指している。

↑イギリス国立公文書館の外観

↑敷地内に遊歩道があり、散歩に訪れる人も多い

リニューアル計画

①理念・使命

「公文書は過去・現在・未来の全ての人に関わるものであり、万人のためにある」とし、多くの人々により多くの方法でより効率的に関わることを同館のパブリック・エンゲージメントの使命としている。

②未来への目標

- 2030年までに年間利用者数（閲覧利用以外の一般利用）を20万人にする
- 人々と積極的に対話・交流する新しいスペースをつくる
- 地方でのプログラムを開発する
- 現施設以外の2つ目の拠点をつくる

③現施設リニューアルのマスタープラン

- マスタープランからこれまで7年かけて、4つの段階に分けて実施している（現在第4段階）。全て実施するには1,500万ポンド（約27億2千万円）の予算が必要。展示室のリニューアルは予算規模が大きいため、政府の予算以外にも寄付を募り、資金調達ができた段階で実施する予定。
- 利用者登録・予約が無くても入れるスペースを増やし、できる限りオープンアクセスとする。自然光をより取り入れる、一般の人が保管庫を覗いて見ることができるビューポイントを設けることなどを計画。
- 現在1つの展示室（企画展示に使用）を、将来的に2つとすることも計画（現時点で予算が確保できてはいない）

常設展示室 （90㎡）	• セミ・パーマネントの展示室とする • 公文書館とは何かにフォーカスした展示、一般の人も自分と公文書との関連を感じ、公文書について理解できる展示を行う • 地方のアーカイブにもつながる展示を行う • デジタル展示を中心とする
企画展示室 （530㎡）	• 資料保護を考慮し、空調管理を徹底、公文書の原本展示を行う • 借用資料活用を見据え、セキュリティや搬入経路の計画をしっかり行う

TNAにおける展示の方針

①今後の方向性（展示方法）

- 「没入型体験」、「アーティストとのコラボレーション」、「スター作品（有名作品）の展示」を行う。

  （例）計画中の、映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」に登場する架空の海賊「デイビー・ジョーンズ」をテーマにした企画展では、所蔵コレクションの文書展示は少なく、借用資料と劇場的な映像展示で展開する。

- アーティストとのコラボレーションは現在も行っているが、より多様な利用者に訴求するため、コラボレーションの相手やコレクションに対峙する方法を多様化する。
- デジタル、AI、VRの活用について館内でディスカッションを行っている。

  （例）火事で焼失したアイルランド国立公文書館の建物のCG再現や、コレクションのデジタル復元を、アイルランド国立公文書館とコラボレーションして実施している

- オリジナルの文書を体験することも重視している。オープン・ドキュメント体験として、展示室内で来館者が実際に文書を触ってページをめくるなどの体験ができるプログラムを行う。

②一般の人々と関わるための方針

- 公文書の中には、請願書や手紙、個人の記録などがあり、それぞれにストーリーがある。人々はパーソナルなストーリー性が見えると入り込みやすい。感情を取り入れる、感情を見せることも重視している。
- 展示の企画・設計・制作のさまざまな段階での一般の人々の参加が有効である。

  （例）現在開催中の企画展「スピリット・オブ・インベンション」での小学生の展示企画への参画（詳細はP8）

③シンボル展示

- シンボルとなる常設展示は設けていない（人々の興味関心を引き付けるために展示の内容を常に更新することを重視）。
- なお、企画展ごとにシンボルは存在（現在の企画展「スピリット・オブ・インベンション」では、19世紀の商務庁のデザイン台帳）。
- TNAには、シンボルとなるコレクションとして、ドゥームズデイ・ブック（ノルマン王朝の土地台帳）、マグナカルタ等があるが、特別な書庫で保存しており、オリジナルを展示することはほとんどない。

オープンスペースでの展示

①キャビネット・テーブル

- 「記録が生まれる場所」の象徴としての展示。定期的に内容を更新しながら、テーブル上で政治・行政に関連する人々を紹介している。
- 現在は「20人の女性閣僚」をテーマに、一席に一人ずつ女性閣僚の紹介とその人に関連する公文書の複製を展示している。

②ストーリーズ・アンボックスド

- 重要な公文書や、時節や記念事業などに関する公文書を「今月のドキュメント」という形で取り上げ、月替わりで展示している。
- 現在は、今年がイギリスの国民保険制度が75周年にあたるため、関連する公文書を展示している。

企画展 「スピリット・オブ・インベンション」

- 夏休み期間の企画展であるため、ファミリーや子どもをターゲットとした、「発明」をテーマに遊びの要素を取り入れた展示。
- 19世紀の商務庁のデザイン台帳をシンボルとなる公文書とし、これを掘り下げる形で展示を構成。デザイン台帳に掲載されている当時の発明の再現、関連する商品・製品の展示、技術要素の紹介などを行っている。
- 展示企画の段階から、9-10歳の小学生10人とともに展示を考えるという取り組みを行った。デザイン台帳から展示で取り上げる発明の抽出、発明家にインタビューをする動画制作を一緒に行った。

↑同企画展のシンボルとなる資料、デザイン台帳

↑展示室入口。デザイン台帳に記載のある「室内ブランコ」に関連して、シーソーが設置されている

↑展示室内部は、デザイン台帳以外に公文書の展示は無く、さまざまなモノの展示や映像・グラフィックなどの解説で展開されている

↑来館者が自分の発明を描いたり、模型を作ったりしたものを壁に貼ることができるスペースを設けている

TNAにおける学習プログラム

①学習プログラムの状況

- 2022年度は約20,000人が利用した。2030年までに、年間の学習プログラムの利用者数がオンラインで20,000人、オンサイトで20,000人、アウトリーチ活動で20,000人となることを目標としている。
- 学習プログラムには (1)展示をベースとしたもの（企画展に合わせたイベントやワークショップ）と(2)指導要領（ナショナル・カリキュラム）によるものがある。発達に遅れがある、障がいのある子ども向けのプログラムも実施している。

(1)オンサイトのワークショップでは、子どもたちはオリジナルの文書を扱う。

（例）企画展「スピリット・オブ・インベンション」では、ビクトリア朝のオリジナル文書を見てデザインの課題に取り組み、子どもたちが発明したものを制作するというワークショップを実施。

(2)教員のニーズとナショナル・カリキュラムのニーズに応える必要がある。国の重要な出来事やテーマを取り上げ、プログ　ラムを企画している（最近では戴冠式に合わせて企画したものもあり）。ヒストリック・ロイヤル・パレスやリッチモンド・ミュージアムなどの施設とのパートナーシップを構築している。

②教員研修プログラムなど

- 教員が文書の専門家から学べるプログラムなど、教員対象の研修プログラムを提供している。

③オンラインリソース

- 教員が文書についての授業を行うための解説ページ、ビデオガイド、障がいのある子ども向けの動画などのリソースなどをオンラインで多数用意している。
- 最新の学術研究の成果を反映するため、大学とコラボレーションしてコンテンツを作成している。

学習関連スペース

①クロレ・ラーニングセンター

- 2023年6月にオープンしたスペース。ブロードキャストセンターとして、オンライン動画やポッドキャストの配信スタジオを持つ。
- 学校団体などのランチスペース、活動スペースも併設。

②ラーニングスペース

- 学校団体向けのプログラムを実施する場。閲覧室に隣接した円形のスペースとなっている。カーテンを開けると閲覧室が見え、子どもたちも閲覧室を利用している研究者になった気分で活動できるようデザインしている。

③オーディトリアム

- 150席の講堂。可動壁を開けると会議室とつながり、200席の広さになる。
- 会議や地元のパフォーマンスグループの催しなどに使われる。

フランス国立公文書館

Archives Nationales (AN)

日　時：2023年7月6日 10:15~13:45
場　所：パリ館
説明者：Brunel氏 (Directeur des publics)
Heiser氏 (Chef de Projet Access Securise a Distance)
Moufflet氏 (Conservateur en charge des projets d'iA-)
Lapazin氏 (Technical Curator for Exhibitions)

日　時：2023年7月7日 13:00-15:30
場　所：ピエールフィット館
説明者：Janin氏 (Responsible du department de la Conservation)
Brunel氏 (Directeur des publics)
Grosclaude氏 (Adjointe de la Responsible du Service Educatif)
Stissi氏 (Responsible du Development des Publics)

基本情報

- フランス国立公文書館（以下AN）は中央行政機関の公文書、パリの公証人の記録、国家にとって重要な民間の記録について、収集、分類、整理、保存、修復、アクセスの提供、及び公的記録の促進を行うことを使命としている。

- 1790年に国民議会により創設された。1808年にナポレオン1世の下でオテル・ド・スービーズ（Hôtel de Soubise）が国立公文書館として使用されることになった。1867年にはミュージアムが併設された。1927年にかつて貴族の邸宅であったオテル・ド・ローアン（Hôtel de Rohan）も国立公文書館の施設に加えられた。

- 公文書の保管場所を拡張するため、パリ館、フォンテーヌブロー館、ピエールフィット=シュル=セーヌ館（以下、ピエールフィット館）と拡張を続けるが、フォンテーヌブロー館は2022年に閉鎖。

- ピエールフィット館が飽和状態にあり、2027年に修復機能を持つ保管庫として新館を建設予定（一般公開は行わない）。

パリ館：18世紀初頭から国立公文書館として機能してきた場所。フランス革命より前の公文書と民間の文書、パリ公証人の記録を保管。
フォンテーヌブロー館：1972年、NATOの建物を国立公文書館に変更。特定の公的コレクション（1974年以降に開設された帰化ファイル、公務員のキャリアファイル、1977年以前に死亡したレジオンドヌール勲章受章者のファイルなど）を保管していたが、2022年に閉鎖し、他2館へ公文書を移管。
ピエールフィット館：2013年に利用開始。ヨーロッパでもっとも大きな記録保管庫である。フランス革命から現在までの公文書、民間の記録を保管。

↑パリ館の外観。正面はオテル・ド・スービーズ（展示室が入る建物）

↑ピエールフィット館外観

常設展示／パリ館

- 公文書とはどのようなものであるか、公文書が歴史をどのように伝えているかを一般向けに紹介する展示を行う。
- 羊皮紙や紙など公文書の素材、保存方法、手書き文字、印刷、暗号などについて、公文書のレプリカや、関連するモノ資料を交えて解説。
- 展示室内にフランス共和国憲法（複製）が展示されている。ただし、常設展示では歴史を掘り下げて扱うことはしていない（企画展示にて扱う）。

↑ 展示室全体の内観。左側手前のケースにフランス共和国憲法（複製）が展示されている。

↑ 素材、保存、文字などの解説とあわせて、関連する公文書の複製を展示

↑ 関連するモノの展示も行っている。上記は羊皮紙の材料となる動物の皮

ミニ企画展示／パリ館

- テーマを設定し、テーマに沿った公文書を一定期間展示している。
- 現在は「死刑の廃止」をテーマに展示を実施。ほか、奴隷廃止、女性参政権に関する文書など、一般の人々が興味を持ちそうなテーマを取り上げている。
- 展示する公文書は、来館者からアンケートを取り、ニーズを取り入れて選ぶ。次回の展示テーマは「注目すべき公文書」であり、館内でアンケートを実施していた。

↑ 「死刑の廃止」をテーマにした展示

↑ 次回の展示「注目すべき公文書」で見たい公文書を人々が投票できるしくみ。投票用紙に候補として挙げられている公文書の中で見たいものにチェックを入れ、ボックスに入れて投票。4つの公文書が選ばれるとのこと。

企画展示／パリ館

- 企画展では、歴史を深く掘り下げて扱う。テーマは、一般の人々が興味を持ちそうなものを取り上げる、新しい文書を収集した際に公表する、時事問題や話題になっている事項を取り上げるなど。文書をベースとして、歴史を再現し、歴史理解を目指す。外部の専門家から企画を募ることもある。
- 現在はルイ16世とマリーアントワネットをテーマとした企画展を行っており、マリーアントワネットとフェルセン伯爵の往復書簡について、新たに判明した調査結果を中心に置いた構成にしている。
- 展示室の規模は360㎡。ストーリーテリングを重視しており、映画のようにシナリオを立てて展示を構成している。文書以外にも借用資料を使用して展示構成を行う（展示資料の50％程度は所蔵文書、残りは借用した実物資料）。
- 企画展の内容はANが決めるが、展示を具体化する際には歴史家など外部の専門家の協力を依頼する場合もある。装飾のためインテリアデザイナーや建築家等の外部にも発注している。
- 企画からオープンまでは2～3年。延べ人数で100～150人が関わる（デザイナーや展示制作会社も含め）。会期は4か月間。

↑ 公文書と実物を組み合わせた展示。コーナー（時代）ごとに空間の雰囲気を変化されている。

↑ マリーアントワネットとフェルセン伯爵の書簡についての研究成果を解説するコーナー

学習プログラム／ピエールフィット館

- ANでは、1950年代から公文書を活用した教育活動を行っている。1980年代にワークショップが流行し、それまでの教員が主導する活動から、子どもたちが中心となる活動に変化した。
- 子ども向けに、羊皮紙などの公文書の素材に触れる、中世の花文字を書き写す、印章をつくるなどのプログラムを行っており、間接的に歴史を学ぶことができるようにしている。例えば現在は、「死刑廃止」をテーマにした演劇の体験プログラムを準備している。
- 小学校のナショナル・カリキュラムに基づいて企画し、ワークショップをつくっている。近年では外国語対応やマルチメディアでの対応なども行っており、マルチメディア室も設置している。
- ピエールフィット館の教育部門は10名のスタッフで構成される。ほか5名の協力者がおり、教員1名が派遣されている。
- 学習プログラムは3か月に1回更新、展示に合わせたプログラムを企画することもある。地方の公文書館と共同で企画することもある。
- 2022年は3歳から大学生まで約11,500人を受け入れた（うち60％は学生、その他は家族連れ、障がい者、教員など）。
- ピエールフィット館では開始して10年で合計20万人を受け入れ（当初は初等教育中心、現在は初等教育と中等教育が半々）。

↑ 学習プログラムのイメージやで利用する材料などのサンプル

↑ 子どもたちを受け入れるワークショップルーム

計画中の常設展示／ピエールフィット館

- ピエールフィット館において常設展示の新設を計画している。パリ館とは異なり観光客等をターゲットとした展示とはせず、公文書館の役割や地域の歴史等を伝えることがコンセプト。地元との連携を強くするため、自治体や地域の教育機関とのミーティングをもち、内容や解説方法を検討した。

【展示の分野】

- 共和国法がたどった道
- 領土：パリとその郊外（地図と写真から）
- 市民を確認、特定する（リストからカードへ）
- 誕生から死まで（公文書がどのように人生を記録するか）
- 文書は語る（言葉やジェスチャー、感情を記録する）
- 親密さの記録（日記、手紙、写真）
- 戦争のシンボル（フルール・ド・リスからマリアンヌまで）

【特集】

- 公文書サービスに関する技術的革新
- 公文書の専門職
- 公文書の利用者